

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)33377-4649

FAX(03)32299-5367

振替 〇〇二〇〇一九一五八四三 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言■

職場を知らない官僚の自己満足

宮坂 要……2

その陰で一〇四七名の二十二年におよぶ苦闘 松田の私の履歴書

奮闘する地域労働運動

西村 昭……4

— 本当の労働組合運動を見た —

権力者の「おごりとアセリ」

濱崎 忠晃……5

— 田母神論文「日本は侵略国家であったか」 —

解雇・派遣切り」と闘う反抗を組織しよう(二)

稲村 守……8

千葉常義さんを悼む

滝野 忠……10

解雇撤回・十五年の闘い

山下 俊幸……11

— 労働組合入門(六) —

読者からのおたより

……13

# 旬刊 社会通信

NO. 1041

二〇〇九年二月一日号

二〇〇九年二月一日発行  
(毎月一日・二五日二回発行)

## 職場を知らない官僚の自己満足

その陰で一〇四七名の二十二年におよぶ苦闘―松田の「私の履歴書」―

JR東日本相談役・松田昌士の「私の履歴書」が、昨年十一月一日から三十日まで、日経紙上に掲載されました。最初は、現場を知らない官僚の「ひとりよがり」の自慢ばなしと、軽べつして読んでいました。しかし、読み進むにつれ、ふつふつと怒りが湧きだし、筆をとることとなりました。

## 国鉄「マル生」の罪悪を美化

まず、許せないのは、国鉄「マル生」の美化と国労に対する誹謗中傷です。これは、国鉄における生産性向上運動と称して、国鉄からの脱退を強要した不当労働行為事件です。国鉄本社の指導の元で、各地方の鉄道管理局が競って、国労からの脱退強要を行ったのです。助役などの管理試験の合格をエサに国労からの脱退を奨めたり、国鉄宿舎への入居とひきかえに国労から脱退させられたり、全国各地で脱退強要が続いたのです。水戸鉄道管理局では、駅長などの現場長を集めて、脱退工作の会議を開催。その一部始終がテープにとられ、これが国会で追及され、ついに、総裁が陳謝する事態となりました。自殺者が出るほどの職場の「荒廃」は、当局による「マル生」の強行が原因でした。「マル生」の罪悪を棚に上げて、職場「荒廃」の原因を労働組合になすりつけるくんだり絶対許せないと怒ります。あの当時、一職場の分会長として苦悩した者の一人として、怒りを覚える一文です。

また、スト権ストとこれに対する国鉄当局による「二〇二億円」の損害賠償問題についても、一方的な国労敵視の暴論となっています。そもそも、公共企業体の労働者からスト権を奪うことは、国際的にも通用しないものです。こうした時代錯誤を棚にあげて、「国労の中には日本の根幹である鉄道事業（国鉄）を混乱させ、資本主義にダメージを与えるという危険な考え方を提唱する人々がいた」として、細井宗一氏（当時の国労中執で革同の指導者）を名指しで非難するなど独断と偏見に満ちたものとなっています。しかも、ILOでは、「コミュニティである細井氏が率いる国労」と宣伝して、「二〇二億円」の損害賠償を不問にすることと誇らしげに述べているのです。詭弁を用いて国労を非難しつづける松田氏の本領発揮そのものといって過言ではありません。

## 時の権力者に取り入る狡猾さ

この松田氏の「履歴書」の随所に出てくるのは、中曽根など時の権力者に取り入る姿です。

国鉄の分割民営化を進めた「三悪人」と呼ばれた井出・葛西両氏とともに「自民党の交通部会長、三塚氏をひそかに訪ねた」と記されています。これは、国鉄本社の「国鉄維持派」の経営陣の目を盗む「完全な隠密行動」だったと述べています。自らを「プ

ランナー」と呼ぶにふさわしい詐欺師の姿が浮かびあがってきます。その結果、三塚氏を委員長とする自民党の「国鉄再建小委員会」がつくられ、「三悪人」が中心となって「三塚小委員会の秘密事務局を発信源として我々が主導する改革案が世に送り出されていく」こととなります。つまり、国労つぶしを主眼とする国鉄の分割民営化に走り出すのです。後に、この三塚小委員会が、全国の国鉄職場に「調査」と称して立ち入り、マス・コミを通じて、「国労悪者論」を展開することになります。

私が国労甲府支部の委員長の頃（一九八二年～八三年）、自民党三塚委員会が甲府駅にも入り、悪宣伝の限りをつくしたことを今でも鮮明に記憶しています。朝の点呼時に職場へ入り、「朝の出勤点呼時に起立せず椅子に座ったままの者がいる」と職場の「荒廃」ぶりをマス・コミにアピールするのです。ところが、実際は一昼夜交代勤務で当日の勤務者ではなかったのです。この他出札窓口で客を装い、故意に横柄な態度で恫喝しておきながら、「接客態度が悪い」と非難するなど、国鉄労働者の悪口をマス・コミに宣伝して引き上げたのです。これらもプランナーを自負する松田氏が指導した秘密事務局の計画だったのか知る由もないところです。

この後も、ある大学教授を通じて、「水面下のコンタクトがいつの間にか中曽根―後藤田―田中―松田というラインを作り上げた」と述べているように時の権力者に取り入る狡猾さが維持され、国鉄の分割・民営化へひた走るのです。

### ドス黒い陰謀で国鉄解体

国鉄の分割・民営化は、公共交通の中心的役割を担う国鉄を解体してしまつたのです。ローカル線の廃止や事故の多発は、国鉄の解体によって生み出されたものです。

これらは、レーガン・サッチャー・中曽根と結んで行われた新自由主義の帰結でもあります。しかし、日本においては、もつとドス黒い陰謀も隠されていたのです。昨年九月の鉄建公団控訴審で証人尋問を受けたJR東海の葛西氏（三悪人の一人）も否定できなかった中曽根発言です。「国鉄の分割・民営化を通じて、国労をつぶし、総評をつぶし、社会党をつぶすことを狙った」ということです。松田氏は、その尖兵として働いていたのです。

もともと、国鉄の赤字は、政策的に作り出されたものでした。新幹線をはじめ、新線建設の際に資本金を増やすことなく、すべて借入金で賄ってきたのです。東海道新幹線が開業された一九六四年に、国鉄が赤字に転落したことが象徴的にそれを物語っています。

政策的につくり出された「赤字」を口実に国鉄の分割・民営化は強行されたのです。

### 一〇四七名の苦闘は続く

「鬼の動労」といわれた動労の松崎委員長とも密談をかわしたことを誇らしげに語る松田氏は、「理想の労使関係」を築いたという。しかし、その陰で、二二年もの間、苦闘を続ける一〇四七名の労働者とその家族のことは全く念頭にないのです。「清算事業団が一人あたりに対して行った就職斡旋は平均で数十回」などと、事実と異なる

記述を平然と並べ、労働組合の所属によって差別された一〇四七名の人びとの苦しみを全く理解しようとしぬ態度です。全国一七地労委や中労委が一致して「組合所属による採用差別」と認定した事実は決して消えるものではありません。また、労働委員会の不当労働行為救済命令に対して、「JRに採用責任はない」とした最高裁の不当判決でも、「もし、不当労働行為があつたとすれば、旧国鉄つづいて清算事業団が責任を負わねばならない」と述べていることを忘れてはなりません。

時の権力者にとり入り、「国鉄改革法二三条」という不当労働行為の抜け道をつくった国鉄官僚の一人であり、直接不当労働行為を指揮した松田氏自身の責任は重大です。

国労所属を理由にJR採用を拒否され、清算事業団でも非人間的な扱いを受けた一〇四七名の人びととその家族の悔しさ、二二年に及ぶ苦闘を無視した松田氏の「私の履歴書」は決して許されるものではありません。

いま、東京高裁を舞台に争われている鉄建公団訴訟をはじめとする一連の裁判で、旧国鉄当局の不当労働行為責任が断罪されるものと確信しています。

(元国労書記長・宮坂 要)

## 奮闘する地域労働運動

### ― 本当の労働組合運動を見た ―

戦後労働組合運動が最も高揚した時期は、池田内閣の所得倍増政策の時か、バブル経済の絶頂期であった。組合は次から次へと闘争を組み、それに答えて多くの組合員がたかたかに参加し、賃金はどんどん上がり組合の組織率も上昇した。これは当時資本主義がそれなりに成功していて拡大していた資本家の利益の一部を獲得していたのである。それにともない政治的闘争も一定の成果を挙げた。社会党が最大勢力を得たのもそのころであった。それが今どうか。ブッシュや小泉の新自由主義政策は完全に行きづまり、格差社会は進展し、リストラの嵐は吹き荒れ、資本主義経済は破綻寸前である。政府の「リストラを条件の救済策」もひどい。本来ならばリストラをしないことを条件に救済すべきなのに、事実はまったく逆である。と同時に大組合の組合活動も停滞し、政府が労働者を見捨てて、資本家だけを救済するのを当然のこととして見ていただけで、なんらの対抗的闘争も組織しないでいる。

そのあたりを受けて、地域労働運動も厳しい局面に直面している。十二月五日に八王子勤労者市民センターの大会、六日に全国一般三多摩支部の大会に出席したが、いずれも困難な状況下、底辺の労働者のために精いっぱい闘争を続けている。いずれも財政的に危機にあり、専従者は無給の状態に活動している。組合専従はボランティアではない、ちゃんと生活を保証しなければならぬはずのものなのである。大衆的なカンパ、国・自治体による補助など、これこそ財政支援が必要である。

しかし、バブル期に高揚したかに見えた大組合の労働運動は資本主義の失敗とともに消えうせ組織率は急降下し、墮落した組合関係者による不祥事すら続出したのに対し、これらの組合はしごとく原則的なたたかいを続けておりこれからも続けるであろう。国労も総評つぶしの象徴的手段として厳しい攻撃にさらされたが、一〇四七名を軸にたたかいを続けている。

東京の教員の「日の丸・君が代」の強制をはじめとする非民主的教育行政に対するたたかいは多くの市民、市民団体、組合の支援を受けている。困難な時にたたかうのが本当の組合である。資本主義の高揚期にだけたたかったのでは意味がない。確かな展望が見えたとまでは言い切れないが、これらの小さな組合のたたかいの積み重ねが、民主党を国民の立場に立たせ、政権交代後、労働組合を強化する政策を実現させ、それをもとに労働者の職の確保、賃金上昇、社会福祉の充実等によって内需を拡大することができると信じている。

(西村 昭)

# 権力者の「おごりとアセリ」

― 田母神論文「日本は侵略国家であったか」 ―

## 概要

1、「わが国は蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者だ。日本政府と日本軍の努力で（満州や朝鮮半島の）現地の人々は圧制から解放された。」

「日本はルーズベルトの仕掛けたわなにはまり、真珠湾攻撃を決行した。」

「自衛隊は集団的自衛権も行使できない、武器の使用も制約が多い、攻撃的兵器の保有も禁止されている。がんじがらめで身動きできない。」

「我が国が侵略国家だったなどというのはぬれぎぬである。」等々、と憲法9条がじやまになることを公然と訴えている。

今年の四月には空自のイラクでの輸送活動を違憲とする名古屋高裁の判決について、お笑い芸人の言葉を引いて『『そんな関係ねえ』という状況だ』と記者会見で話し、原告からの抗議をうけるなど、物議をかもしたのが田母神幕僚長である。

2、この論文発表を機に浜田防衛相は、本人に政府の見解と異なっていることを理由に「これは駄目だ」と叱責し辞職を迫った。本人は「私の見解が間違っていますか」と反論し、森、安倍元首相の名前をあげて「私の考え方は理解されている」として辞職に応じなかった。十一月十一日の参議院での参考人質疑でも「憲法を改正すべき」「私は間違っていない」と証言した。

## 背景

1、論文募集の主催はホテル・マンション経営のアパグループである。その代表は元谷外志雄であり、その著書『報道されない近現代史』の中では「日本の核武装」などが主張されていて田母神論文と軌を一にするものだといわれている。その出版記念パーティーは白井日出男元防衛庁長官が発起人となっている。また元谷氏は安倍元首相の後援会「安晋会」の副会長もつとめていた。田母神航空幕僚長を任命し、承認したのは安倍内閣である。

2、航空自衛隊のOB会「新生つばさ会」や一〇万人を超す自衛隊OBの最大組織「隊友会」には、田母神事件が発覚して以降「彼ひとり孤立させてよいのか」「会をあげて彼を応援しよう」などの意見が相次いでいるという。現役幹部のあいだでも「よくやった」という受けとめが目立っているようだ。

3、「昨年七月の参議院比例区で当選した自民党の佐藤正久元陸上自衛隊イラク派遣先遣隊長の発言も不気味だ。イラク・サマワに駐留する陸自の警護に当たっていたオランダ軍が攻撃を受ければ「情報収集の名目で現場に駆けつけ、あえて巻き込まれる状況を作り出して警護するつもりだった。」これも憲法が禁じている海外での武力行使に当たる行為を口走っている。

自衛隊幹部の間では、そんな感覚が普通になってきているようだ。その人が自衛隊を代表し参議院議員に当選している。

自衛隊の洋上給油活動の虚偽報告も同種の間違った感覚ではないだろうか。補給艦「ときわ」から米補給艦「ペコス」に給油した燃料は、同日にイラク戦に参加している空母キティホークに給油されていた。名目はアフガン支援であった。

4、田母神氏が自衛隊の最高幹部を育成する統合幕僚学校長の時に、「日本の歴史と伝統への理解を深めさせる」として、二〇〇三年にカリキュラムに「歴史観・国家観」の講義を新設している。講師陣には田母神論文と同じ侵略戦争を美化する歴史観をもつ人たちが起用されている。そして懸賞論文への応募も空幕人事教育部長名で周知徹底し、多数の自衛隊員が応募したのである。

5、十一月二日付で産経新聞の「主張」欄「歴史観を封じてはならない」で、「村山談話」は見解であって「政策」ではない。「村山談話」こそ見直すべきだと述べている。さらに十一月十一日付紙面には十二月に出版する懸賞論文受賞作品集『訪れる国、日本』の全面広告を掲載し田母神論文の全文を掲載した。そして「東京裁判六〇年歴史観の呪縛から脱却を」と主張し田母神氏を激励している。

### 政権党の政治家たちは―

1、十一月十一日の自民党の国防関係合同会議では田母神論文擁護論が噴出したと伝えられている。論文募集を主催した元谷氏は田母神氏との親交が深く、自民党など政治家の中での人脈が広がっていると云われている。自宅に政界要人を招く懇談の場となるワイン会は雑誌「アップルタウン」の連載企画ともなっており、侵略戦争美化、米国の占領政策批判や核武装論も語られているという。

2、麻生首相は「文民統制をやっている日本で、幕僚長という、しかるべき立場にいる人の発言としては不適切。それがすべて」と発言した。その内容が誤っていると糾弾しないで、立場上の発言に問題があるとして簡単に片づけてしまった。懲戒処分どころか、七千万円の退職金が支払われたのである。

3、「政府筋は十一月六日田母神論文について『あんなもの大した論文じゃない。日本人みんなが思っていることだ』と記者団に述べた」の新聞記事があるくらいだ。石川要三元防衛庁長官も取材に対して「田母神氏の議論は基本的に肯定する」と語ったと報ぜられている。

4、朝日・東大共同調査によると、次期衆議院選挙の立候補予定者は、憲法9条について自民党の八三%が「変えるがよい」と回答している。こうしてみると、文民統制すべき政治家の側に田母神論文に書かれた考え方が深く浸透していると見るべきではなからうか。まさしく辺見さん（作家）の文章（『山陰中央新報』08・11・24掲載の「クーデターのあとさき『桜会』は生きているか」にあるように、「処分しようにも、するほうにその加担者があったため手がつけられなかった」のではなからうか。

5、前経団連会長でもあったトヨタの奥田碩氏の発言も悪辣だ。テレビの厚労省に対する批判報道について「あれだけ厚労省がたたかれたのはちよつと異常。マスコミに対して報復でもしてやろうかと思う。スポンサーを引くとか」という趣旨の発言。

二〇〇六年のトヨタグループの広告宣伝費は四五一一億円と伝えられている。一億円づつの広告宣伝費でも四千五百の会社に圧力をかけることができる。その人物が、憲法9条改悪を強力に主張し、政権の中核に大きな影響力を持っている。二〇〇七年のトヨタ自動車の政党への献金は六四四〇万円である。

あらゆる分野で大企業を中心とする日本経団連が、勤労大衆がつくり出した金で政策を買い、政治家やマスコミを動かす実態を見逃してはならないと思う。

### 歴史 軍隊の一人歩き

一九三一年（昭和六年）九月一八日満州事変がおこっている。爾来、一五年戦争がはじまる。

関東軍が計画的に中国の奉天郊外の柳条湖の満鉄路線を爆破し、中国軍の仕業だとして攻撃をはじめた。翌日に奉天、長春、營口などの沿線都市を占領する。九月二一日には満州に派兵。宣戦布告なしに満州事変がおこっている。「在留邦人の安全確保の出兵」が大義名分である。この時、幣原外相は九月一九日付新聞で軍部が独走した戦争を知ったと回想記の中で書いているようだ。若槻内閣は事変の不拡大声明を出したが、関東軍の独走はとまらなかつた。

### 闇はみためよりよほどふかい

侵略戦争の被害は、あまりにも大きいものだった。日本人三百一〇万人、アジアを中心に世界で二千万人以上の死者を出したと云われる。この反省の中から戦争放棄と戦力不保持の憲法が生まれた。

それは国民の平和を願う心と一つとなつて、今日まで生き続けてきた。しかし「日本が東アジアでリーダーシップをとるには、軍事力強化が必要ではないか」「米国の場合、海外進出企業が地域紛争に巻き込まれても空母を派遣すれば安泰かもしれない。しかし日本の場合、現状のままだと個別企業が天に祈るしかない」と、財界要人の本音が公然と飛び交うようになって情勢は一変した。そして今、制服組が堂々と憲法9条改正、軍事体制強化をめざして動きだした。財界や政界の動向、マスコミの実態を読みとりながらの自衛隊幹部の動きであろうと思われる。

戦前の五・一五事件、二・二六事件当時とあまりにも似かよつた経済、政治、社会のもとでの動きであるが故に、一層の不気味さである。現状では、平和憲法を守り活かす勢力が、ばらばらにこの情勢に対応しているように見える。この勢力が、心一つにして活動が強化されることを勤労大衆は強く望んでいる。世直しはみんなの力を結集してこそ実現できる。

危険な感覚を失せてはならない！ そんな思いを強めながらペンを置きます。

（濱崎 忠晃）

## 解雇・「派遣切り」と闘う「反抗」を組織しよう（一）

「もう待てない」と一月四日から外国人労働者相談開始

一昨年結成した武庫川ユニオン滋賀支部は毎月第三日曜日に学習・相談会をもっているが、一月は「十八日まで待てない」と、新年四日から急遽相談会が開かれた。年末にブラジルやペルーなどから来ている外国人労働者の解雇問題の相談が同国人の組合員にあいついだからである。

正月気分が未だ冷めやらぬ一月四日昼過ぎに、同じ県内とはいえ一時間車でぶつとばし会場に向うと、なぜか路上に何台かの車。いつも借りている会館がまだ営業開始していなかったのである。ここらへんはかなりラテンアメリカ的だが、昨秋一ページすべてを割いて、「二〇〇九年問題」などわがユニオンの特集をしてくれた毎日新聞のおなじみの記者と初登場の読売新聞記者も同行し、急遽委員長宅に会場を移して相談会を行うこととなった。

（いつものように）案内状もビラも作っていないのに、車で二〇分ほどかけてたどりついた委員長宅にはいっぱいの相談者がすでにつめかけていた。ペルーからやってきたセト委員長宅は、四年前に新築したなかなか潇洒な一戸建てである。去年中労委でダイハツの構内下請け会社の組織破壊攻撃に勝利和解を勝ち取った、ブラジルから来たワカバヤシ書記長宅も近くとのこと。書記長は保育所の保護者どうしでの話して、セトさんからユニオンのメリットを聞いたと言う。

プラスチック製造の同じ派遣先会社で五年、のべ九年働いた男性のDさんは年末急に「一月の前半は五時間勤務、後半は年休で一月末に解雇」を言い渡され、二人の同僚と参加。派遣法違反（製造業派遣解禁以前から何年間も直接指揮で労働）と年休の日数未消化と解雇予告手当未払い問題、一方的短時間労働の残時間の休業補償要求などがあるが、だいたい「仕事は普通どおりある」のに「日本人二百人、派遣（大半は外国人）六十人のうち派遣十八人に解雇が言い渡されるのはおかしい」し、解雇されたら「子ども、孫含めて食っていけないからブラジルに帰るしかない」と。次回、今月十八日まで解雇対象者全員をユニオンに組織しようと思し統一。

その他、派遣元でも「三月までみんなを首にする」といつているとか、その連れ合いさんも年末に別の会社で何にもなしで解雇されたとか、「栃木県に行ったら仕事があるが、いやなら辞表を書け」と言われた女性、解雇したのに予告手当などを払いたくないので言を左右にしているT電機会社社長の問題とか、三十人を首切るD自動車会社専門のA派遣会社の問題（かつて数十人のユニオン組合員がいた。他と比べてだが、今回はかなりの条件を出すとのこと。まさしく武庫川ユニオン効果だ）などなど、クリスマスツリーがまだ飾られている日系二世宅の応接間いっぱいの相談が繰り広げられ、翌日の読売新聞朝刊に写真入で大きく報ぜられた。

## 年末のハローワーク前でつかんだ首切られた派遣労働者の切実な声

京都総評（結成して五十八年、七万人）は寒い雨の降る昨年末十二月二十二日、京都市内三箇所（ハローワーク前で求職者のアンケートを取った）。

七条ハローワーク・五十三名分、西陣所・三十二名分、伏見所・三十五名分、計百二十名分の回収を行い、ビラ配布は各三百枚位、雨が降りいつもの十分の一くらいの来訪者とのことだが、七条では持参した長机に二名ずつ、ひっきりなしに雨を押しして熱心な筆記が行われた。

三十代の男性は電機会社の登録型派遣、月収十五〜二十万円。派遣先（三菱電機）の減産による派遣契約中途解除にあった。九月二十二日に知らされ、九月三十日で勤務終了となった。派遣先（日本ケイテム）から、別の派遣先に行くか、休業補償（派遣労働契約の残期間の休業手当）のいずれかを選択することを言われ、休業手当を選択。その後、派遣元の担当に、最初に提示された派遣先の紹介を求め電話、その結果は、「間があいたから、紹介できる状態ではない」と言われた。今は、失業給付で生計をたてている。家の賃貸契約が来年一月で終わるが、家賃の負担に困っており、住む場所を無くしかねない。生活の見通しが無い状態になっている。

この人は、アンケート用紙に上記をびっしりと書いて、相談員に三、四十分語りかけ、「派遣会社の担当者を殺そうと思った。隣が交番だったのでやめた。秋葉原事件なんて起こって当然だった」と切々と訴えた。

「倒産」で解雇、「印刷会社」という回答もあり、今、京都で労働争議の中心となり頑張っている大美堂の元社員だったのでという人もあった。十二月二十四日には『派遣切り、雇い止め』を許すな、緊急アピール行動」をもち、「ちゃんこ若」労組や大美堂労組を先頭にサンタクロースに扮した青年部員などが人目をひきつつ、クリスマススライブの都大路を一時間半デモ行進をして市民に訴えた。

## 〃 人生のけじめ〃として尊厳かけて闘う

JR京都駅前での国鉄京都共闘会議の毎月十六日の宣伝行動は千九百九十年四月以来、本年二月で二百回目を迎える。破産・倒産も起きてこの間急激に労働争議が多発し、二千二年、京都コンピュータ学院争議が終わってからさたやみになっていた争議支援総行動を、約十年ぶりに京都でも二月十八日に再開しようとして準備中である。

本紙新年号で紹介された昨年六月二十七日からの京都・大美堂印刷社の争議は、予期せぬアメリカと日本の資本主義の大恐慌のおかげ（！）で、五ヶ月の苦しい連日の工場泊り込みの「独自の闘い」を経て、今やマスコミの取材合戦の状況を呈し、各紙近畿・全国版カラー写真入、テレビの特集番組で放映もされ、年末「大望年会」は複数のテレビ局のライトを浴び全テール録画取りされた。まるで映画スターの記者会見場のようなであった。当該労組・二十四人一人も崩れず支援共闘も拡大し、京都銀行の競売一時中止、二ヶ月雲隠れしていた社長交渉を二度行いオーナー専務追求で労働

債権と再雇用先確保に向け前進している。「会社再建の展望は残念ながら、工場占拠を納得行くまで人生のけじめとして闘い、次の就職先を何歳であろうときっちり確保させるために闘う」と意気高い。

付記すれば、いわゆる「製造業の二〇〇九年問題」は不幸にもこの「派遣切り・雇止め」の嵐で「解決」されてしまったと見ていい。これは、本年二月末で三年の製造業派遣期限切れを迎え、その後直雇用したくない企業がどうするかの問題だったが、それを前にして解雇してしまえば問題自体が消滅してしまう。それにしても武庫川ユニオン滋賀支部でも十一月中旬までこの対応をめぐる学習会をしていたのだから、情勢の変化は激しい。

そして、「ワークシェアリング」がマスコミ・資本家側からさえも言われる。そんな労働者どうしの傷のなめあい、責任転嫁の前に独占資本の儲けをはきださせる、  
「マネーシェアリング」をこそ09春闘で要求すべきだ。

また、国鉄闘争を国鉄闘争だけで闘うべきではない。派遣・非正規・外国人労働者をはじめとする反首切り、反貧困闘争と結合し、窮乏化法則に基づき「資本主義切り」の闘いをこそ開始すべきである。そうすれば、鉄建公団訴訟高裁判決など何も怖くない。

年明けてキューバ革命五十周年を迎えた。ピコ・トルキノ山頂で十二人が生き残り「これで勝利できる」とカストロは宣言した。すでに千四十七名中五十一名の仲間の尊い生命を失ったが、まだ千人近い仲間がいて、ともに反首切り・反貧困を闘う仲間  
は急激に拡大している。今年も頑張ろう。  
(〇九・一・八 稲村 守)

## 千葉常義さんを悼む

一月六日、「通信」一〇四〇号の仕上げと他誌への原稿書きに追われていた午後八時すぎ、ファクシミリの電音音。FAXには悲しい、びっくりするほど悲しい文字が簡潔につづられておりました。

「訃報 新社会党山形支部 千葉常義様（元中央本部執行委員）、一月六日、一五時一九分 永眠されました。謹んでお知らせいたします」

私の古里は三重県の津、第二の古里が北海道、そして第三が山形県、とくに米沢です。米沢の仲間の中にはいつも千葉さんの温和で、そして厳しい姿がありました。

千葉さんは約束を必ず守る人、己を律すると同じ態度で私に接してくださいました。千葉さん、そして山形の仲間との交流が深まったのは、労働戦線再編、国鉄民営化、さらには政界再編へと突き進み、社会党が基本原則を踏み外し、「次をどうする」といった時でした。

千葉さんと山形の仲間たちは、米沢・置賜地域を中心に新しい旗を立て、千葉さんは平成の「埋め草捨て石」として、参院選に名乗りあげられました。そんな千葉さんが逝ってしまった。一月九日の告別式会場には力づよく大きな筆で「平和を愛し平和を求めた 人生悔いなし」と記されておりました。  
(滝野 忠)

# 解雇撤回・十五年の闘い

―労働組合入門（六）―

## 職場の点検・摘発

職場環境はどうなっていますか。年休は自由に取れますか。要員は不足していませんか。小集団や提案の強制はありませんか。労働災害や職業病はありませんか。サービス残業や残業の強要はありませんか。組合運動の自由はありますか。

まず、職場の事実を知ることです。日頃気づかないことも皆で議論すると分ることもあります。

例えば、職業病はなかなか気がつきません。電電公社の頸肩腕障害、営林署の白ろう病、そして多くの職場で発症した腰痛も、当初は個人的体質と言われたものです。しかし、職場では日常の闘いを一歩一歩積み上げて、労災認定を勝ち取り、今日では精神疾患や過労死、自殺も労災に認定されるようになりました。

点検・摘発闘争は、同じような症状の人がいるか、仕事と症状の因果関係の解明―顕在化闘争、そして認定闘争、補償闘争、職場改善闘争へと発展しますし、何よりもこの一連の闘いを通じて職場の労働者全体の意識が変わってきます。

点検項目を策定してみんなで職場環境や権利について点検してみても良いでしょう。

学習―点検・摘発―方針の確立―闘いの実践―自己批判的総括。これを繰り返すことです。

## 闘いの実践と自己批判的総括

どんな困難な問題でも、闘わず逃げ出すことはやめましょう。闘えば小さくとも必ず成果はありますが、闘いを放棄⇨不戦敗では何の前進もありません。

職場に学習会を定着させるのも、討論するのも闘いです。課題によっては医師や弁護士を招いての学習会の開催、大衆を先導、組織するための門前ピラマキ、社宅への全戸ビラ配布、工場長等管理者への抗議行動をみんなで実践する。組合役員選挙では、深夜も含めて職場オルグ、どんなに罵声を浴びせられても家庭オルグをやってきたことを思い出します。

数多くの職場闘争を経験してきました。その基礎は「労働者こそ社会の主人公」、労働者が大切に、人間らしく生活できるように、との視点で職場を見渡すと課題は山ほどあります。仲間から相談を受けるようにもなります。そして、これらの闘いの実践は労働者の意識変革をもたらし、この過程で多くの活動家が生まれました。

直接的にも成果を求めることは大切です。闘いを通じて、労働者が「闘えば必ず成果はある」と自信を深めるからです。

第二は闘争を通じてさまざまな課題、職場環境や労働条件に対する見方が鋭くなります。私たちの闘いと組織づくりについて、少し紹介しましょう。

会社のレクレーション行事における重大事故に対する闘いは、終業時間外、しかも会社敷地外、自主参加という条件の下で困難をきわめました。しかも被災者は会社協力派に属していました。しかし、一歳、三歳、四歳の三人の嬢さんを抱えた被災者は頸骨骨折による半植物人間状態でした。

自主参加という名の強制の実態は、日ごろの職場支配体制で明らかでした。参加を呼びかけられて断れる条件はありません。まず、労災認定を勝ち取りました。その後、約一年半の闘いで労基法、労働協約の長期療養補償給付制度（三年間の打ち切り給付制度）を突破して、事実上生涯補償を勝ち取りました。

指名休業制度とも闘いました。病弱者を狙い撃ちにした追い出し攻撃でした。休業させられた仲間の家庭訪問したり、いすゞ自動車へ出向させられた現地へ行き激励したり、転勤できない仲間には、組合と一緒にやって要請にいたり、本社の社長にも電話で抗議したり、精一杯の闘いでした。

こうした日常の闘いの積み上げで、会社派の中にも地殻変動が起こり理解者が生まれ、カンパや物販にも協力してくれるようになりました。

また、解雇争議では、解決まで十五年かかりました。私たちは当初、自主的な非公然の学習会から始まり、徐々に良心的活動家が結集しました。一年後ほどから、おの職場で組合役員選挙に立候補し、組合役員に選出され、労災や合理化問題など具体的課題で闘争を全面的に開始しました。

一九七四年の組合執行部選挙は全面対立となり、僅差で敗北しました。私が三〇歳の時でした。私は「来年は勝てる。いよいよ御用組合よオサラバ、労働者の組合ができる」と総括し激を飛ばしました。

### 配転・出向めぐって

その年の秋、工場の一部操業停止と二〇〇名の配転・出向が提起されます。会社・組合は「配転・出向は強制しない」という協約を締結します。私たちは、それでも必ずやられると訴え、合理化反対闘争を開始します。組合員の反応は「強制はしないと知っているではないか。転勤希望者もいるのだからいいではないか」というものでした。たしかにこの機会に故郷の工場に転勤したい、という人は組合の行ったアンケートで約一〇〇名いました。

闘いは困難をきわめました。労資は合意し、いよいよ配転命令になると、転勤できない人に攻撃が集中し執拗に続きます。転勤できずに大勢の人が辞め、逆に転勤希望の人には転勤させない、ということも起こりました。

当然ながら、見せしめ的に活動家にも集中しました。「活動家についていたら自分もやられる」との思いで離れていきます。いよいよ攻撃は激化し熾烈な闘いが始まります。私たちは「転勤を拒否して闘う」ことを確認し、配転拒否による解雇となり、そして一四名の解雇撤回闘争は九〇年まで十五年の闘いとなりました。

結果は勝利的内容でしたが、当時、「強制配転を拒否して闘う」ことを決断したりリーダーの一人として、一五年という長期争議になったことで当事者やその家族が受け

た苦しみや苦闘を考えると、あの決断は正しかったのか、と今でも考え込んでしまいます。本当に申し訳ないという気持ちになります。闘いで獲た財産、そして失った五年、この総括はまだまだ続きます。

### 「労働者の世界観」共有へ

「入門」ですから、総花的になり一つ一つの問題に深みはありません。具体的テーマごとの学習も必要ですが、資本と労働者の基本的関係を中心に提起しました。一部自身の経験談も入れました。

差別・弾圧をなくする闘いを始めれば、差別・弾圧は強まります。その差別・弾圧に屈することなく闘い続けることによって差別・弾圧はなくなりません。一時的な差別・弾圧を恐れていては、いつまでも何も変えることはできません。

賃労働と資本の関係を充分理解し、労働者共通の世界観を共有するための学習を開始しようではありませんか。

労働組合の学習会が再建されること、多くの活動家が誕生するきっかけになればと思います。活動家の皆さんにとっては不足でしょうがお許し下さい。

(おわり・山下 俊幸)

## ◇ 読者からのおたより ◇

学力テスト 昨年度から小学六年と中学三年で全国一斉に行われているこのテストをめぐって、さまざまな議論があります。今年の学力テストの費用が約五八億円とのこと。これだけの予算があるのなら、もっと教育条件の整備に回すべきだと思います。自民党の中でさえ、学力テスト不要論があるとされています。本当に子どものためになるのかどうか。その当たりの議論が必要ではないでしょうか。行うことが前提で、その上結果の公表が前提だとすれば、何ら教育的効果など端から期待することが無理です。結果の学校別成績の公表などは問題外だと思います。競争原理だけでは学力の向上など望めないのではないかと思います。「点数でははかることのできない学力」そのようなことこそ大切だと思います。

(福山市議 西本 章)

○八賃金確定闘争スローガン 行革で 県は再建？ 職員破綻！ 増やせ賃金 減らせ超勤  
なくせパワハラ 勤務時間 短縮されて ゆとり生む (兵庫県職)

異聞「流行語大『傷』」から 昨年の賞は不作が多かったので、選外の中から選んでみました。

①マンガ脳 ②私はあなたと違って客観的に見られるんです ③日本が侵略国家というのは全くのぬれ衣である (茨城・H)

協働のまちづくり 今年三月、町の憲法とも言える「まちづくり基本条例」の制定が町議会で議決された。この条例は、『協働のまちづくり』を基本理念とし、町民・議会・行政が共通認識のもと、それぞれが果たすべき役割や責任といった自治体運営のルールを確立し、自主的・自立的な持続可能な地域社会を創ることを目的として定められたものである。最近、町職員有志が、自分たちも一町民であるという立場に立ち、様々なボランティア活動を行っている。冬期間、高齢者宅や公営住宅の屋根の雪下ろしを行っているほか、ふる里まつりなど町内のイベント運営にも積極的に関わってきており、『協働のまちづくり』を実践している。しかし、これらの活動が今後も持続可能にするためには、まず権利が守られなければならない。過疎化と少子高齢化の現実の中で自立したまちづくりを進めて行くために、雇用という足場をしっかり固めた上で難局にあたる必要がある。

(北海道上川町議・安部逸雄)

反貧困世直しイッキ「集会宣言」 小さな違いにこだわって、負け続けるのはもうたくさんだ。敷居を下げ、弱さを認め、弱さの自覚の上に、強い絆(きずな)を作る。それが、私たちの運動であり、私たちの世直しだ。声をあげよう。居場所を作ろう。仲間を増やそう。一人一人が、もう一歩

を踏み出そう。そして、社会を変えよう。政治を変えよう。もう一度言う。私たちは、垣根を越えたつなかりを作ろう。労働者派遣法を抜本的に改正させ、社会保障費二千二百億円削減を撤回せよ。貧困の削減目標を立てさせよう。そして、誰もが生きやすい社会を作ろう。それが、私たちの権利であり責任だ。(〇八年十月十九日)

**矛盾爆発の中で** 資本主義の矛盾が誰の目にも明らかとなつているのですが、組織する主体が私も含めて問われます。組合内に向かいがちで反省しています。(東京・平岡博範)

**編集部より** 今年は労戦再編成から二十年。なんといつても労働組合のあり方です。**若者を招待** お元気ですか。私は何とかガンバッテいます。先日、党大会終了後の交流会に若い仲間達を招待し交流を図ることができました。私達が努力すれば若い人達も活動に協力してくれます。自分達が努力しないとダメですね。(北海道・五十嵐正雄)

**編集部より** 健康回復にまず乾杯です。昨年は行けませんでした。今年こそ!

**一九二九年** いま非正規の問題がマスコミで報道されていますが、一九二九年当時の二の舞にならないように、ファシズムにならないように、広く国民の意識を喚起するようがんばらねばなりません。岡山でも頑張っているところです。(岡山・H)

**編集部より** 米国は「国難」の時、挙国一致となる国。オバマの米国はひよつとすると「ファシズム」へのチェンジにならないとも限りません。

**十一月でOBに** 購読料一ヶ年分送金します。残金はカンパとして取り扱い下さい。十一月でOBとなりました。月一回若い人達(他労組中心)との集いを行っています。もうすぐ一年になります。三、九人の集いとなっています。今年もホントの情報を提供して下さい。(千葉・織本潤一)

**編集部より** 反マル生、スト権ストでレベルがさびた。彼これ四〇年もたつちやつた。ご愛読に感謝です。仲間ひろげて下さい。

**「労働組合入門」楽しみ** 連載されている山下さんの「労働組合入門」たいへん勉強になりますね。毎回、楽しみ。私は網走の地で少しずつ地域運動をつくっていきます。(北海道・鈴木 孝)

**編集部より** 山下さん、四十有余年の活動の集大成の一つです。彼には今一つ、国鉄闘争があり

**雇い止め** 昨年十二月、私の職場の派遣・契約社員の八割に当たる三十名ちかくが雇い止め―首切りになります。人件費削減のために採用されたこれら社員がまったく同じ理由で首切りとは。組合を強化しなくては。(鹿児島・T)

**編集部より** あなたの職場でもですか。年明け、山形県に行きました。電機産業の協力会社ではなんと八百人の契約社員が切られた。タクシー・ドライバールの話です。

**残金はカンパです** 〇九年も少しずつがんばります。(東京・C)

一年分の誌代、残金はカンパとさせていただきます。(東京・S)

〇九年分誌代、残金はカンパで! (兵庫・S)

**編集部より** カンパに感謝、さらにはがんばる。ご支援を。

**「戸別補償制度」必要** 今年の米作りもほぼ完了。石油類や資材が上がったほどは米価は上がり、米作農家はますます貧困化が進んでいます。ヨーロッパで当たり前の戸別補償制度を日本でも取り入れないと、米作り農業やる人はいなくなります。(福島・円谷 寛)

**編集部より** 農業について身近なこと、都会で農業知らない私たちにさらに教えて下さい。

**格差社会ぶっ潰す** 「学習一生、闘い一生」共に頑張ろう! 格差社会をぶっ潰すまで(東京・T)

**再購読へ?** 「社会通信」も三十三年目ですか。労働者に勇気と希望を与えてくれる通信だと思えます。私もおかげ様で体調は回復しています。一ヶ月に一回は通院しています。秋頃には、『通信』再購読お約束できると思います。今年もよろしく。(埼玉・O)

**編集部より** 再購読は嬉しい。その前にしっかりと身体なおして。

**これもマル生?** 組合の色がまったくない私の働く局、たいへんな年繁(年末繁忙)でした。郵産労の組合員って、組合ニュースに書いてあることと、やっていることはぜんぜん違いますね。ある種、マル生! (JP労組・T)

**編集部より** 共産党系の労働組合はどこも同じ傾向ですね。過日、国公関連のある仲間が電話で話してくれました。「ある種」じゃなく、マル生そのものです。